

第9回 目的語

教科書の該当ページ：24 ページ、62～65 ページ、73～74 ページ、
76 ページ、90 ページ、189 ページ

目的語の表示 → 教科書第7課⑧、第8課②

第4回で、フィンランド語の目的語は分格で表わされると学びました。しかし、目的語は、属格や主格で表わされる場合もあります。目的語の格の使い分けには3つの条件が関わっています。

一つは目的語名詞の性質です。目的語名詞が可算名詞の複数あるいは不可算名詞の場合は**分格**が使われますが、その他の場合(つまり、可算名詞の単数の場合)は**属格**で表わされます。

例) 私は本を買います。 Ostan kirjan(単数属格). [可算名詞の単数]
私は本を何冊か買います。 Ostan kirjoja(複数分格). [可算名詞の複数]

次に、動詞が表わすアスペクトが関わっています。目的語が可算名詞の単数であっても、動詞が未完了あるいは継続的な動作や状態を表わしていると、その目的語は**分格**になり、動詞のアスペクトが完了のときだけ**属格**になります。

例) 私は本を(これから)読みます。 Luen kirjan(単数属格). [アスペクトが完了]
私は本を読んでいます。 Luen kirjaa(単数分格). [アスペクトが未完了]

さらに、目的語が可算名詞の単数で、動詞が完了の意味を表わしていても、その文が否定文の場合は目的語が**分格**になり、否定文でないときだけ**属格**になります。

私は本を売ります。 Myyn kirjan(単数属格). [肯定文]
私は本を売りません。 En myy kirjaa(単数分格). [否定文]

以上のように、多くの場合、目的語は**分格**で表示されますが、「目的語名詞が可算名詞の単数」かつ「動詞のアスペクトが完了」で、「文が否定文でない」ときだけ、目的語が**属格**で表示されます。

命令文 → 教科書第3課④、第8課⑦

命令文「Bを～しなさい」は、「命令形の動詞+目的語B」で表わされます。このとき、目的語Bは、「目的語名詞が可算名詞の単数」かつ「動詞のアスペクトが完了」で、「文が否定文でない」ときは**主格**で、その他の場合は**分格**で表示されます。命令文の目的語が属格で表示されることはありません。動詞の命令形は、人称語尾を取り去った形、つまり語幹の形と同じです。

例) 本を読め。 Lue kirja(単数主格)! [アスペクトが完了]
本を読め。 Lue kirjaa(単数分格)! [アスペクトが未完了]
上の文は「一冊の本を全部読め」と言っているのに対し、下の文にそういう含意はありません。

単数分格形の作り方 → 教科書第7課⑤、第17課②

単数分格形の語尾には、-a/-ä のほかに -ta/-tä があります。-ta/-tä がつくのは次のような語です。

- 1) 単数主格形が長母音、二重母音で終わる語
- 2) 単数主格形が子音で終わる語
(ただし、ihminen「人」のように単数主格形が-nen で終わる語、oikeus「権利」のように単数属格形が-den で終わる語は、次の3)を参照)
- 3a) vesi(veden)「水」や oikeus(oikeuden)「権利」のように単数属格形が-den で終わる語
(ただし、lehti「雑誌」のように単数主格形が-ti で終わる語は除く)
- 3b) kieli(kielen)「言葉」のように単数属格形が-len で終わる語
- 3c) uni(unen)「夢」のように単数属格形が-nen で終わる語
- 3d) saari(saaren)「島」のように単数属格形が-ren で終わる語
- 3e) ihminen(ihmisen)「人」のように単数属格形が-sen で終わる語

1)と2)の場合は、単数主格形に-ta/-tä をつけると単数分格形になります。

3a)の場合は、単数属格形の-en をとって、その前の-d を-t に変えてから-ta/-tä をつけると単数分格形になります。(veden → vettä、oikeuden → oikeutta)

3b)~3e)の場合は、単数属格形の-en をとって-ta/-tä をつけると単数分格形になります。(kielen → kieltä、unen → unta、saaren → saarta、ihmisen → ihmista)

また、huone「部屋」のように単数主格形が-e で終わっている語は、単数主格形に-tta/-ttä をつけると単数分格形になります。(huone → huonetta)

複数分格形の作り方 → 教科書第9課⑥

複数分格形の語尾には-ia/-iä, -ita/-itä があります。語幹が短母音で終わっている場合は-ia/-iä、語幹が母音2つで終わっている場合は-ita/-itä がつきます。-iは複数を表わす目印です。この-iは母音には含まれると-jに変わるので、-ja/-jä がついているように見える場合もあります。複数分格形の語尾を語幹につける際、語幹の最後の母音が脱落したり、別の母音に変わったりする場合があります。複数分格形の作り方は名詞・形容詞のグループごとに決まっていますが、グループの数が多いので、面倒でも単語ごとに複数分格形を覚えてしまった方がよいでしょう。

例) talo「家」	単数分格形	<u>taloa</u>	複数分格形	<u>taloja</u>
koira「犬」		<u>koiraa</u>		<u>koiria</u>
kissa「猫」		<u>kissaa</u>		<u>kissoja</u>
puu「木」		<u>puuta</u>		<u>puita</u>